新潮文庫

マルテの手記

リルケ

大山定一譯

新潮社

マルテの手記

定價100圓

新潮文庫

昭和二十八年六月十日 發行
昭和三十年十一月十日 六刷

譯者 大山定一

發行者 東京都新宿區矢來町七一 佐藤亮一

發行所 東京都新宿區矢來町七一 株式會社 新潮社
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替 東京 八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・藤田印刷株式會社 製本・憲專堂製本所
Printed in Japan

新潮文庫

マルテの手記

リルケ
大山定一譯

新潮社版

533

"DIE AUFZEICHNUNGEN DES MALTE LAURIDS BRIGGE"

by

Rainer Maria Rilke

Copyright 1952 by SHINCHOSHA COMPANY

はしがき

リルケは「マルテ・ラウリツ・ブリッゲの手記」を一九〇四年から書きはじめて、一九一〇年にやうやく完成した。リルケは四百頁にたらぬ小説のために七年の歳月をつひやしたのである。アンドレ・ジィドは夙くからこの小説の眞實な價値をみとめた一人であつた。彼は一九一一年のn・r・f誌にすでに「マルテの手記」の二三のエピソードを飜譯してゐるのである。これは後年リルケがジィドの「放蕩息子の歸郷」を飜譯したのと思ひあはせてみると、二人の作家がおたがひをどんなに畏敬してゐたかがわかつて非常におもしろいとおもふ。

現在おこなはれてゐるフランス譯はモーリス・ベッツが完譯したもので、晩年のリルケの熱心な協力によつてできた、みごとな飜譯である。ドイツ語でよむと難解な箇所も、フランス語といふ言葉の明晰な美質によつて却つてこの方が鮮明になつたかも知れぬ、とリルケはそんな感想をもらしてゐた。僕は邦譯に際して、ぜひベッツ譯を參照しなければならぬとおもひながら、たうとうそれができなかつたのを殘念におもつてゐる。「マルテの手記」は近代ドイツの最もユニークな小説といつて間違ひないが、特にフランスで非常に注目された作品である。ベッツの完譯が出版されるまでにも、いろいろな文學雜誌はこの小説の斷片斷片をほとんど競爭のやうに飜譯掲載したらしい。むろん、その理由は、ここにパリの生活が書かれてゐるといふやうな單純なものではなかつた。「マルテの手記」が一群のフランス青年作家に、ちよつと想像できぬくらゐな感

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

銘をあたへたのは、この作品の極度にあたらしい純粋な精神と、深いたましひの奥底にせまつてくる異常に深い表現力だつたにちがひないのである。

わが國では昭和十年ごろ堀辰雄氏が雑誌「四季」にいくつかの斷片を飜譯したのが、おそらく「マルテの手記」の最初の移植だつたとおもはれる。僕は「マルテの手記」はほとんど日本語にならぬものだらうと考へてゐたが、このとき堀辰雄氏の「マルテの手記」のうつくしさにびつくりしたのである。僕は昭和十四年白水社から最初の飜譯を刊行した。今度はそれを全文にわたつてほとんど改譯といふべき訂正をほどこしたのである。舊版についてすみずみまで實に詳細をきはめた御教示を下さつた恩師成瀬無極先生に、こころから感謝の意を表したい。

なほ、この書物には最小限度とおもはれる程度に、譯者註、解説などをつけた。リルケの潔癖な精神がそのやうな無用の附加物をきらつたのはよくわかるが、僕は「マルテの手記」が一人でもおほく親しい氣持でよまれることをねがつたのである。この小説の世界と日本の現實とを隔てゐる歴史的な、地理的な距離のおほきさを考へたとき、僕はどうしてもこんなまはりくどい方法をとらずにゐられなかつたことを告白しなければならぬ。

昭和二十四年十一月一日

大山定一

マルテの手記

第一部

九月十一日トウリエ街にて

人々は生きるためにこの都會へあつまつて來るらしい。しかし、僕はむしろ、ここではみんなが死んでゆくとしか思へないのだ。僕はいまそとを歩いて來た。僕の眼についたのは不思議に病院ばかりだつた。僕は一人の男がよろめいて、ぶつ倒れたのをみた。たちまち大勢が人垣をつくつたので、それから彼がどうしたかわからなかつた。僕はしばらくして一人の姙婦に出會つた。彼女は重たい足どりで高い日向の塀にそうて歩いてゐた。時々、手をのばして塀を撫でながら歩いた。塀がまだつづいてゐるのを確めでもするやうな手つきにみえた。そして、塀はどこまでも長くつゞいてゐるのだ。僕は塀のなかは何だらうと、地圖をだして索してみた。それは市立病院だつた。ああ、さうだつたのか。女はお產をしにゆくらしい。產院なのだ。そこからまたすこし行くと、サンジャック街へ出た。圓屋根のある大きな建物がたつてゐた。地圖をしらべると、ヴァル・ド・グラスの陸軍病院である。こんなことは、むろん、格別知る必要もないのにちがひないが、知つたとていまさら氣にかけることはないのである。街路が一齊に匂ひはじめた。ヨードホルムと馬鈴薯をいためる油脂と精神的な不安と、僕はどうやらこの三種の匂ひを嗅ぎわけることが出來た。夏になると、どこの町もにほひはじめる。と、そんなつまらぬことを考へてゐるう

ちに、奇態な内障眼のやうな家が一軒眼についた。地圖には出てゐなかつたが、ドアのうへに漸く讀める文字で「簡易宿泊所」と書いてあつた。入口のよこに定價表が出してある。僕はそれを讀んだが、むろん高價ではなかつた。

今日、このほかに僕がみたのは、置きつぱなしの乳母車に乘せてあつた子供である。よく肥つて、薔薇いろの皮膚をして、額に出來たおできが目だつてゐた。おできはもう癒つてゐるらしく、ちつともいたまぬやうな樣子だつた。子供はねむつてゐた。おほきく口をあけて、ヨードホルムやいためた馬鈴薯や精神的な不安などのにほひを平氣で呼吸してゐた。僕は感心してぢつとみてゐた。——生きることが大切だ。とにかく、生きることが何より大切だ。

窓をあけたままねむるのが、僕にはどうしてもやめられぬ。電車がベルをならして僕の部屋を走りぬける。自動車が僕を轢いて疾驅する。どこかでドアの閉まるおとがする。どこかでまどガラスがはづれる。僕にはおほきなガラスの破片が哄笑し、小さな碎片が忍びわらひするやうな氣がしたりした。と、突然、別な方向で、家の内部で、にぶい、押しかくしたやうな物音が、聞えはじめる。誰かが階段をのぼつて來るのだ。いつまでも、いつまでも、登つて來る。やがてその跫音が僕の部屋のまへでとまる。もう大分ながく止つてゐる。と、やつと行きすぎた。するとまた、そとの街路にかはる。むすめが甲高いこゑで叫ぶ《もういいかげん默つて！》眞向から電車がひどく興奮して突進してくる。そして、何も彼も平氣で轢いてゆく。誰かが呼んでゐる。大勢の人々が、われ先きにと駈けつける。犬がなく。犬のなきごゑは僕にとつて何といふこころの慰めだつたらう。やうやく夜あけちかくなると、またどこかで鷄が鳴いた。鷄のこゑを聞くのはも

试读，需要完整PDF请访问：www.

うこの上もない僕のよろこびだつた。どこかとほくに鶏鳴をきくだけで、僕はもうその瞬間、ほつとした安堵からたわいない眠りにおちてゐた。

これは街上の騒音だ。しかし、もつと怖ろしいのは巷の靜寂でなければならぬ。僕はおほきな火事には極度な緊張の一瞬があるやうにおもつてゐる。そのとき、ポンプの水は噴出をやめるし、消防夫の梯子をのぼる姿ひとつ見えないだらう。誰ひとり動かない。黒々とみえる屋根の飾緣が音もなく迫り出してくる。炎々ともえる焰をつつんで高い壁がしづかに傾いてくる。人々はただ肩を張つて、眼を見つめて、怖ろしい一撃をまつてゐるのだ。僕にはこの都會の靜寂が、そんな無言の恐怖とすこしも變らないのである。

僕はまづここで見ることから學んでゆくつもりだ。何のせゐか知らぬが、すべてのものが僕のこころの底に深くしづんでゆく。普段そこが行きづまりになるところで決してとまらぬのだ。僕には僕の知らない奥底がある。すべてのものが、いまその知らない奥底へながれ落ちてゆく。そこでどんなことが起るかは、僕にちつともわからない。

今日、僕は手紙を書いた。そして、僕がここへ來てまだやつと三週間にしかならぬのに氣がついた。ほかの土地の三週間、たとへばどこか田舍で暮らす三週間などは、ほとんどありふれた一日とちがはないのである。しかし、この都會の三週間はまるで數年のやうだつた。僕はもう手紙を書かぬことにしよう。僕はまるで別人になつたと、誰かに告げる必要があるだらうか。別の人

間になつてしまへば、僕はもうむかしの僕でないのだ。以前の僕とちがふのだ。僕はもはや一人の知人もない。未知の人々、僕を知らぬ人々に、どうして手紙が書けるだらう。

さつきも書いたが、僕はぼつぼつ見ることから學んでゆくつもりだ。僕はほんたうの最初の一歩を踏みだすのだ。どうもまだうまくはゆかぬ。しかし、出來るだけ、極度に時間を利用して、やつてみたいと考へてゐる。

たとへば、僕は顔といふものが一體どのくらゐあるかなど、意識して考へたことはなかつた。大勢の人々がゐるが、人間の顔は然し一層それよりもおほいのだ。一人の人間は必ずいくつかの顔を持つてゐる。ながいあひだ一つの顔を持ちつづけてゐる人もある。顔はいつのまにか使ひ古されて、汚なくなり、皺だらけになつてしまふ。旅行にはいて出た手袋のやうに、たるんでしまふ。それはつつましい、貧しい人々だ。彼等はいつまでも顔をかへない。垢をおとすことすらしない。彼等が自分はこれで結構だと言つてゐるのだから、誰もさうでないとほかから證明してみせることは出來ぬ。しかし彼等だつて、やはりいくつかの顔を持つとすれば、いはば餘分になつた顔をどう處分するのだらう。彼等はその顔をただしまつて置くのである。おそらく子供らにそれをあたへるつもりかも知れぬ。また、或は彼等の飼ひ犬がその顔をもつて道ばたをあるいてゐることさへあるやうだ。「まさか?」と君はいふのか。顔はやはり顔なのだ。

それと反對に、不氣味なほどはやく、一つ一つ、顔をつけたり、はづしたりする人々がある。自分ではいつまでも顔のかけがへがあると思つてゐるらしい。しかし四十歳になるかならぬで、

顔はもうこれが最後の一つになつてしまふ。むろん、悲劇である。彼等は顔を大切にすることを知らなかつたものだから、最後のたつた一つの顔も一週間とたたぬまにぼろぼろにしてしまふ。穴ができ、ところどころ紙のやうに薄くはげ、やがて次第に地肌が出てくる。もはや、それは顔でも何でもないのだ。そんな顔をつけて、世のなかを彼等は仕方なくさまよひ歩いてゐる。

しかし、あのときの女。あの女はまるで身體を二つに折つたやうに腰をまげてゐた。兩手のなかへすつぽり顔をうめてしまつてゐた。僕はノートル・ダム・デ・シャン街の町角で會つたのだ。僕はその女をみると、跫音をしのばせて歩きはじめた。可哀さうな人間が考へごとに沈んでゐるとき、その邪魔をするのがいけないくらゐ僕だつて知つてゐた。考へごとが、ぷつつり絲の切れたやうに、そのまま中斷されてしまふのが氣の毒だ。

ところが、町はひつそりしてゐる。もうしづかさに飽き飽きしてゐたらしい鋪道は、僕の跫音を鞠みとつて、つい退屈さのあまり木靴のやうにからからと打ちならしたものだ。女はおどろいて上半身をおこした。あまり素早い、あまり急激な身體のおこしやうだつたので、女の顔は兩手のなかに殘つてしまつた。僕は手のなかに殘された鑄型のやうに凹んだ顔をみたのである。僕はおそろしく一所懸命になつて、その手のなかを見つめてゐた。手のなかから持ちあげられた顔をみないために、僕はひどく眞劍な張りつめた氣持だつた。裏がへしになつた顔をみるのは不氣味にちがひないが、顔のない、のつぺらぼうな、こはれた首をみる勇氣はさらになかつたのだ。

僕はおそろしい。僕はこの恐怖に對してまづ何か適當な處置を考へねばならぬ。僕がこの都會

で、もし病氣になつたら、どんなに困るだらう。誰かの手で市民病院へ送られたら、僕はきつと死ぬにちがひない。この病院は大へん立派で、出入りする人々も非常におほい。そこからカテドラルの建物の正面をみようとして立つてゐると、廣場をよこぎつて非常な速力で走つて來る數々の車のためにあやふく轢き倒されさうな氣がして、おちおち見てゐられぬくらゐである。警笛を鳴らしづめにして小型の乘合が絶えず出たり入つたりする。どんなつまらぬ病人だつて、市民病院へ駈けつけようと考へただけで、サガン公爵の自家用馬車をとめることが出來るのだ。死んでゆく人間は變に頑固だ。たとへばデ・マルチル街に住んでゐる古物商ルグランのおかみさんだつて、ここへ來るときだけは、巴里全市の交通をとめることが出來るだらう。これらの呪はれた小型の乘合には、よく見ると、變に人目をひく乳色ガラスをはめた窓があつて、その窓のなかの悲しい病人の死苦を何となしに想像させるやうに出來てゐる。ただ玄關にぼんやり立つてゐるポーターの想像力だけで充分想像がつくのだ。もしもつと立派な想像力を持つてゐる人間が、ちつとばかり別な方向にそれを用ひたとすれば、さらに無限な場面場面を思ひゑがくことが出來るにちがひない。しかし、僕がふと見てゐると、幌のない辻馬車でくる病人もあつた。幌をうしろにたたんだ辻まちの馬車で、規定の料金で、ややおくれ勝ちにはいつて來た。一時間が二フランの辻馬車だ。死んでゆく一時間がたつた二フランといふ勘定である。

この有名な市民病院は非常にふるいもので、すでにクロヴィス王の時代から、その幾つかのベッドで患者が死んでいつたのである。いまではベッドの數も五百五十九にふえ、まるで工場か何

かのやうな樣子にかはつてしまつてゐる。そして、このやうな巨大な機構のなかでは、一つ一つの死などてんで物のかずにならぬのだ。まるで問題にもされぬのだ。むろん、それは大衆といふものがさせるわざにちがひない。入念な死にかたなど、もう今日の時勢では一もんの價値もなくなつてしまつてゐる。誰ひとりそんなことを考へるものもないのだ。いざ死ぬにしても、それを入念に準備するだけの充分に餘裕をもつた富有な人々すら、だんだん物臭になり冷淡になりはじめた。自分だけの特別な死にかたをしようといふやうな望みは、いつとなしに薄れてしまつた。やがて、自分だけの死にかたも、自分だけの生きかたとおなじやうに、この世のなかから跡を絶つだらう。何も彼もがレディイ・メードになつてゆく。人間はどこからかやつて來て、一つの生活を見つけだす。出來あひの生活。ただ人間はその出來あひの服に手をとほせばよいのだ。しばらくすると、やがてこの世から去らねばならぬ。否應なしに出てゆかねばならぬ。しかし、人々は何の苦勞もいらない。——もしもし、それが君の死ですよ。——あ、左樣ですか。そして、人間はやつて來たとおなじやうに無造作に立ち去つてゆく。人間は自分の病氣が持つてきてくれる死をただ死んでゆくだけで、ちつとも怪訝まぬのだ。（あらゆる病名がわかつてしまつてから、どんな最期の決算もみんな疾病のせゐになり、その人その人の持ち味などはまるで無くなつてしまつた。ただ病人は手をこまねいてゐて、もう何一つすることがなくなつてしまつたのだ。）

病院ではみんなよろこんで、醫者や看護婦たちに感謝しながら死んでゆく。病院にはその施設に對應した一樣な死があるだけである。むしろ、それが患者には氣やすいのだ。しかし自分の家で死ぬとなれば、誰でも立派な家柄にふさはしい鄭重な死にかたを選ばねばならぬ。病氣の床に

つくと同時に、いはばもう特等級の豪奢な埋葬式がはじまるのだ。そして、さまざまのすばらしい慣例が無數にあとからあとからとつづくのだ。さういふ邸宅のまへには貧しい人々があつまつて、いつまでも飽かずに立つてゐる。自分らの死にかたは、いふまでもなく粗雜な、造作のない死である。どうにか我慢の出來る死にかたで結構滿足しなければならぬ。着物のやうに、いくらかゆるすぎても苦情はいはれない。すこしぐらゐは死んでからだつて人間はおほきくなるのだ、と無理に思つておく。ただ胸のボタンがかからなかつたり、喉がくるしかつたりすると、ちつとは彼等も當惑するだらう。

いまはもう誰ひとり知るべもない故郷のことを想ひだすと、僕はむかしはさうでなかつたと思ふのだ。むかしは誰でも、果肉のなかに核があるやうに、人間はみな死が自分の身體のなかに宿つてゐるのを知つてゐた。（いや、仄かに感じてゐただけかも知れぬ。）子供にはちひさな子供の死、大人にはおほきな大人の死。婦人たちはお腹のなかにそれを持つてゐたし、男たちは隆起した胸のなかにそれをいれてゐた。とにかく「死」をみんなが持つてゐたのだ。それが彼等に不思議な威嚴としづかな誇りをあたへてゐた。

僕の祖父、老侍從ブリッゲも、一目で、死を宿してゐる人間にちがひなかつた。しかも、その「死」は何といふ死であつたらう。彼の「死」は二箇月もさけびつづけ、そのおほきなこゑは屋敷のそとまで聞えたのである。

彼の「死」にとつては、古い、廣大な屋敷がちひさすぎるくらゐであつた。侍從職の身體は却

此为试读，需要完整PDF请访问：www.